

古代西域亀茲国に関する考古学研究の最新の進展

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 肖 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1622

古代西域亀茲国に関する考古学研究的最新の進展

中国社会科学院考古研究所边疆民族与宗教研究室

李 肖

1. はじめに

古代亀茲国は現在の新疆ウイグル自治区阿克蘇(アクス)地区の庫車(クチャ)、新和(シンホー)、沙雅(シャルル)、拜城(バイ)などの県の境内に位置し、中心地区は庫車県である。亀茲国はタリム盆地の北縁、天山南麓の中部に位置し、漢唐時代の「シルクロード」北道上(漢以後は西域中道と呼ばれる)の大国であった。この国はタリム盆地北縁の東西交通の要衝であり、また盆地から北へ天山を越えて伊犁河谷に達する要路に位置する。前漢・後漢の時代の西域都護府、唐代の安西都護府などは全てこの地域に設置され、当時の西域の政治・経済・軍事の中心であり、漢唐西域史の中で非常に重要な地位を占めている。

考古学の発掘から、遅くとも紀元前8~7世紀には、この地域は青銅器時代となり、やや遅れて早期鉄器時代へと移行したことが判明する。史料に記載された歴史時代の亀茲国では冶金業が発達しており、それは最近の調査によっても証明されている。

19世紀の末から、外国の探検家と中国の考古学者黄文弼先生が考古調査を行い、イスラム化以前の西域および古代亀茲国の様相を明らかにした。ただし系統的な考古学調査は1980年代から始まる。中国社会科学院考古研究所は1999年に拜城県(バイ)の多崗墓地を発掘し、2000年には亀茲古城に対して調査を行った。そして2001年には亀茲地区の精錬遺跡の調査を行った。これと同時に亀茲地区の交通路、墓、岩壁画、烽火台、仏教寺院、古城等に対して調査を進め、今後の総合研究のための基礎資料を得た。

2. 研究成果の紹介

2-1. 拜城県亜吐爾郷多崗墓地の時期および文化の特徴

亀茲地区の青銅器時代の文化は1930年代に発見され、1950年代に阿克蘇東遺跡、カラユルコン遺跡と亀茲のカラードン遺跡などにおいて調査が行われた。1980年代以降、亀茲地区のクンバック墓地、キジル墓地、多崗墓地などの調査により、この地域の早い時期の文化に対して系統的な理解が得られた。

多崗墓地は拜城県の亜吐爾郷に位置し、キジル千仏洞、キジル古墳群より直線距離で約20kmほどであり、300基ほどの墓葬がある(図1-11)。自然の地勢によって3区域に分れる。墓葬の墳丘は全て円形で、直径6~17m、高さ1.5~1.8mである。墓は主に楕円形の堅穴で、長さ1.8~3m、幅1.5~2m、深さ1~1.5mである。墓口は木を並べて棚蓋とし、埋葬方式は主に側身屈肢葬で、少量の仰臥屈肢葬、仰臥伸展葬と伏臥葬がある。単独

の一次葬があり、主に墓地の北部に集中している。夫婦の合葬や多人数の2次合葬もある。ある墓では4層にわたって人骨の堆積が見られ、層ごとに1~3人が埋葬されている。副葬品には金・銅・鉄製品、土器、石器、骨器、貝製品などがある。土器は夾砂紅陶の単耳帶流円底罐、盆等を主とする。文様は連続三角文、垂幛文、菱格棋盤文、十字文などがある。金器には、金箔、金のイヤリングと青銅に鍍金を施した装飾品などがある。青銅器には馬具、直柄刀、鏃、紡錘車、別針、バックルなどがあり、その中で瓦紐銅印は今回の発掘における重要な成果である。前漢の時期の中原の人物の私印であり、年代を判定できることに意義がある。鉄器には刀、勺、牌飾などがあり、すべて南部の墓葬区から出土している。骨器には紡錘車、針、錐などがあり、ト骨は今回もつとも重要な収穫である。石器は主に化粧棒、砥石と紡錘車等である。

多崗墓地の年代はおよそ春秋~戦国時代に相当し、北部が古くて南部が新しい。一部の墓葬は漢代のものである。墓地の南縁では文化の様相に変化が生じる。帶流罐は次第に消滅し、円底釜にとってかわる。生業では農耕・牧畜が併用され、食料は主にキビと羊・牛の肉が比較的多い。墓葬には明らかに貧富や階層の差が見られる。一部の墓葬の柵木の上には殉葬された人間が発見されている。埋葬習俗から見ると、晩期の家族構造は一夫一婦を核としている。子供の死亡率は比較的高く、子供を埋葬する小型墓がある。成人の墓の埋土中に葬られる例や合葬される例もある。

多崗墓地の文化は近くにある拜城県キジル墓地と極めて近い。同時に周辺地区と一定の関係や交流が見られ、一部の遺物にはユーラシア草原遊牧文化の影響が見られる。

2-2. 亀茲古城の時期および構造

亀茲古城は現在の庫車県の新市街と旧市街の間にあり、庫車河の東岸にある(図12-15)。古城は別名「マザブトー古城」、「ピーラン古城」と呼ばれる。スタイン、黄文弼以後、この50年ほど調査は行われなかった。

今回のボーリングと測量を主として考古調査で、古城の城壁、大型建築遺構を調べた。以前の調査と比較すると、

- 1) 古城の範囲と城壁の具体的な方向を確定し、経緯度を記した古城の平面図を作成した。
- 2) 古城が魏晉~宋代(この地域がイスラム化する以前)に属することを確認した。

- 3) 内城の城壁の痕跡が発見され、三重の城壁というこの城に関する史料の記載を証明した。
- 4) 西城壁が消失した原因は庫車河の大洪水であることを確認した。

亀茲古城の平面構造はおおよそ方形を呈し、周長 7125m、そのうち北壁は全長約 1960m で、西壁は 20 世紀初頭の調査時にはすでに消滅していた。今回の観察では西壁の全長は 1275m、北壁の東や南壁の西端に少し版築の壁体が残るほかは、地表にはすでに何も痕跡がない。古城の北部のグムバグ台地上に内城の痕跡があり、城内各所の建築遺構の分布を加えると、基本的には史料に記載されている「その城は三重にして、中に仏塔、廟一千所あり」に符合する。

亀茲城は歴史時代には建築の広大なことで有名であった。古城内外には、ピーランドン、カラードン、サクサクドン、ロカイードン、クムバグ内城などの多くの建築遺構が残っている。内城は古城の東北部の「クムバグ」台地上にあり、全ての城の中で最も高い位置にある。平面は長方形に近く、辺の長さは 140～200m である。城内地下 1m の所に敷かれた地磚が発見された。表面には一層の藍釉がかかっているものもあり、建築の規格化されていたことを物語っている。

1950 年代から、古城の範囲内で貯蔵穴や遺物が発見されている。主要なものは大陶缸であり、古城の文化様相および時期の上限・下限を明らかにするために重要な情報を提供する。魏晋時代のこの地域は、「胡人は奢侈にして、養生に厚し。家に葡萄酒あり、或いは千斛に至る。十年を経るも敗せず」という。これらの大陶缸は当時の葡萄酒の容器である可能性が高い。出土した唐代の貨幣、亀茲文と回鶻文を記した土器片およびカラハン王朝の貨幣などの遺物は亀茲古城のそれぞれの時期を反映している。

2-3. 古代亀茲地区の精錬遺跡の考察と研究

亀茲地区は豊かな鉱産物を蓄積していた。たとえば銅、鉄、塩化アンモニウム、石油等である。この地区は比較的早く青銅器時代に移行した。古代の採鉱、冶金業はこの地区に冶金に関連する豊富な遺跡を残している(図 16-19)。調査状況から見ると、亀茲地区の採鉱、精錬の開始時期は断定できないが、拜城県のキジル墓地、多崗墓地ではすでに青銅器が存在しており、なおかつ普遍的で、それらは当地で鑄造したものと思われる。墓地の晩期には鉄製品が見られるようになる。今回調査した製鉄遺跡では、出土した土器片はキジル墓地、多崗墓地と同一の文化に属しており、当地の鉄器時代の上限を判断する上で重要である。張騫が西域を訪れて以来、中原地区の先進的な製鉄技術が西域に伝わり、亀茲国の製鉄技術を高め、鉄鉱の産出量と質を西域の各国の中でも最高レベルのものとした。国内の需要を満たす以外に、周辺国家にも提供した。

今回発見された冶金関連の遺跡は 37 箇所であり、そのうち銅は 24 箇所、鉄は 11 箇所、石油の油田が 1 箇所、塩化アンモニ

ウム鉱が 1 箇所ある。一部の遺跡は天山の深いところにあり、馬に乗り一日山を越えてやっと到着することができる。これは当時の採鉱活動の規模が非常に大きかったことを物語っている。特に製鉄遺跡は規模が極めて大きく、文化層の堆積も厚く、継続して使われており、史料に記載されている「(亀茲国の鉄製品は)恒に(西域)三十六国に充つ」は決して誇張した表現ではない。

2-4. 古代亀茲地区の交通路線に関連した遺跡

漢唐時代、中央政府は亀茲地区に烽火台、守捉、戍城の設備を設置していた。新疆地区の乾燥した気候のおかげで、これらの建築遺構は千年以上経た後もなお保存されている。拜城県内で発見された後漢時期の「劉平国治関城誦」(図 20)は、亀茲古城からボズコニューコ山口を経て、天山を越え、イリ河谷へと至る路線が、漢代の亀茲国と天山以北の烏孫を結ぶ重要な通路であったことを示している。

2-5. 周辺地区の文化との関係

先史時代から歴史時代において、亀茲地区の考古学的文化は東の焉耆盆地と非常に類似している。仏教が伝わって以後、仏教芸術は西側の疎勒地区の影響が大きい。たとえば、巴楚県のトクズ・サライ寺院遺跡などがその一例である(図 21-23)。

3. 結論

意義：古代亀茲国はタリム盆地の周辺地区で比較的早く文明時代へと移り変わったオアシス国家であり、シルクロードの重要なポイントである。その仏教芸術はアジアの東の日本にまで影響を及ぼしている。この地の考古学の研究は、内陸アジアの文明の変遷過程や、東西文明の交流に占める古代亀茲国の地位についての理解をさらに深めるであろう。

調査の将来の展望：考古研究所は国家文物局のテーマ「シルクロード北道の仏教遺跡の調査と研究」を引き受けて、2003 年から調査を行う。



図1. 多崗墓地墓壙



図2. 多崗墓地墓壙



図3. 多崗墓地遺物出土状況



図4. 多崗墓地遺物出土状況



図5. 多崗墓地遺物出土状況



図6. 多崗墓地遺物出土状況



図7. 多崗墓地遺物出土状況



図8. 多崗墓地遺物出土状況

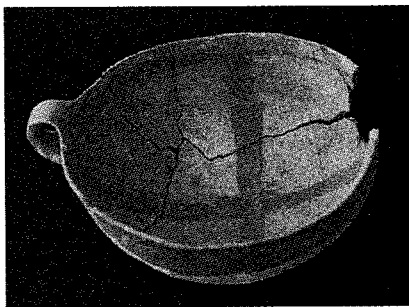


図9. 多崗墓地出土土器

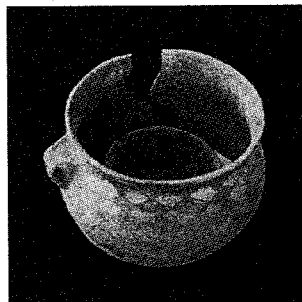


図10. 多崗墓地出土土器

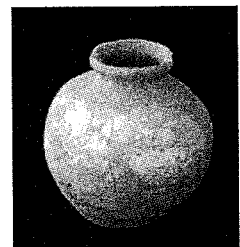


図11. 多崗墓地出土土器



図12. 亀茲古城城壁

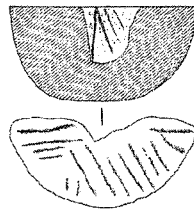


図13. 亀茲古城出土品



図14. 亀茲古城出土品

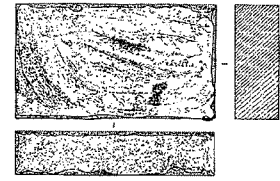


図15. 亀茲古城出土品

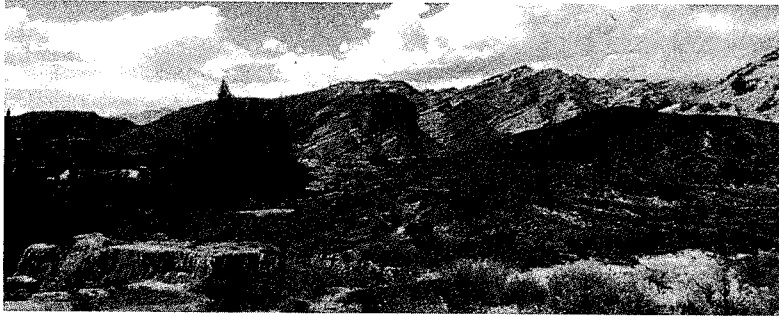


図16. 亀茲地区の冶金遺跡



図17. 亀茲地区の冶金遺跡



図18. 亀茲地区の冶金遺跡

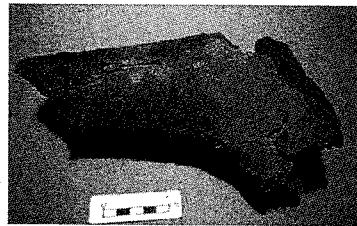


図19. 冶金遺跡出土品

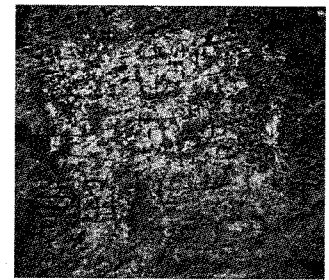


図20. 「劉平国治関城誦」



図21. トクズ・サライ寺院遺跡

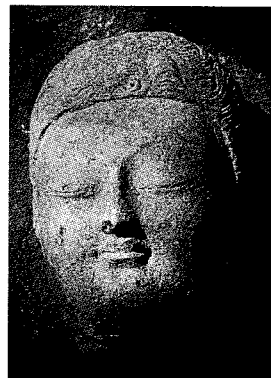


図22. トクズ・サライ
出土品

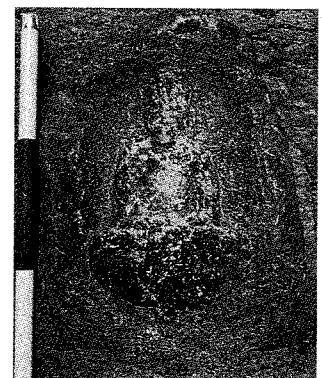


図23. トクズ・サライ出土品